

1 自己評価

I 評価結果

- 1 高質な学力を伸ばす【B】                      2 生徒の主体的な活動など様々な挑戦を応援する【A】  
 3 道徳心の涵養と社会人としての心構えをつくり、青陵生としての品格を磨く【B】

A: 当初の見込みを超える取組を行うことができ、目標を上回る達成状況である。 B: 当初の見込みどりの取組を行うことができ、ほぼ目標どりの達成状況である。

II 分析・改善方策

1 高質な学力（学力の3要素）を伸ばす

(1) 知識・技能の定着と学ぶ意欲を涵養する授業づくり

- ・休校中はG Suiteを活用したオンライン授業を実施した。登校日に生徒の状況を把握しながら、自学自習できるよう課題の量、バランスを調整した。再開後も継続的に動画や課題等を発信している。
- ・学校自己評価アンケート（以下、「アンケート」という。）「授業の内容の充実、指導方法の工夫」では、教員と生徒ともに肯定回答が90%を超える高い評価を維持できている。G Suiteを活用したオンライン授業を様々な形で行ったこともあり、教員の評価が昨年度より上昇した。
- ・探究・協働の視点を取り入れた授業研究を進める予定だったが、感染症対策のため協働的な活動を取り入れた指導ができず、十分な実践には至らなかった。公開授業や他校訪問も実施できなかった。
- ・アンケート「教員相互の研修」では肯定回答が教員73%で、過年度と比較しても高い数値を維持している。

(2) 総合的な探究の時間を軸とした、3年間を見通した探究活動の確立

- ・従来のプログラムを改良し、SDGsの視点を組み入れた。大学入試で活用することができる、3年間を見通した探究学習のプログラムを検討・運営することができた。
- ・アンケート「探究的な学びや発表の場の充実」の肯定回答が教員73% (R1) からの93%に上昇した。「よくあてはまる」に限ると19%から44%に伸びている。感染症対策のため内容の変更を余儀なくされたが、学年団の共通理解を図る機会を持ち、丁寧に進めたため、教員の意識の変容がみられた。生徒は92%と高止まりであるが、保護者の15%が「よくわからない」と回答している。探究学習の広報誌を発行し、ホームページで活動内容を紹介しているが、周知の方法が今後の課題である。
- ・外部講師による教員研修は中止となったが、身に付けた力を評価するルーブリックや来年度の指導のガイドとなる指導案等をまとめた冊子を作成した。

2 生徒の主体的な活動など様々な挑戦を応援する

(1) 資格やコンテスト、国際交流等への挑戦

- ・当初予定していた国際交流活動やコンテストが中止される中、生徒に勧めるコンテスト一覧の作成に教科等の視点で携わることで全教員の意識を高めた。
- ・アンケート「コンテスト等への挑戦」の肯定回答が教員42% (R1) から73%に伸びており、意識の向上が見られた。生徒の肯定的な回答も昨年度とほぼ同じ割合を維持できた。
- ・オンラインで国際科学コンテストの指導を行った。参加者は増加したが、入賞が今後の課題である。

(2) 生徒が主体となって企画・運営する行事

- ・様々な場面で生徒がリーダーとしての役割を自覚し、委員会や部長会等で話し合う場面を増加するなど、学校行事において生徒が主体的に企画・運営を担って活躍できる場面を設定した。
- ・アンケート「学校行事で自主的、積極的に活動できる体制」の肯定回答が生徒・教員ともに90%を超えた。多くの学校行事が制限され、青陵祭の規模は大幅に縮小となったが、生徒会を中心として、生徒が制限の中でもできることを考え、充実した学校祭となった。
- ・対策を徹底して部活動を行った。多くの大会が中止となる中、全国・中国大会で活躍した部もあった。
- ・生徒が主体的に運営できる学校行事は本校の大きな強みであると考え、今後もさらに生徒が主役となり、自ら企画・運営する仕掛けづくりをし、生徒を支援していく体制を整えることが重要である。

3 道徳心の涵養と社会人としての心構えをつくり、青陵生としての品格を磨く

- ・キャリアカウンセリングをキャリアパスポートと連動させることで、面談後に生徒自身が面談内容の振り返りが行えるようにし、より効果的に実施することができた。
- ・キャリア教育にもオンラインを活用し、先端的な学問等に触れる機会を設定した。
- ・アンケート「人権問題について学ぶ機会」の肯定回答が教員・生徒とも90%と高い割合を示した。喫緊の課題である感染症への差別・偏見の防止のため、人権だよりを発行するなど、人権意識を啓発した。保護者の25%が「よくわからない」と回答している。発信方法を工夫し、周知を図る必要がある。

2 学校関係者評価委員名

森川政典（大原美術館副館長）                      石田 隆（岡山教育事務所 指導主事）  
 藤井 瞳（川崎医療福祉大学助教）                      岡田展弘（同窓会長）                      小川 灯（PTA会長）

3 学校関係者評価

- ・学校自己評価の結果などから学校の取組が具体的な成果に繋がっていることが伺える。
- ・教職員の共通理解のもと、校内の取組が組織的に進められていると感じた。
- ・探究学習が効果的に進められており、大学進学にもつながる取組となっている。
- ・小中学校では、デジタル教科書やICT機器の活用が進んでいる。高校の授業も変える必要がある。
- ・感染症対策のため、授業等を見学する機会が減少したが、学校の情報がホームページ等で効果的に発信されているので、学校の様子を知ることができる。
- ・現状の中で見えてきたことを精査・検証することで青陵高校の進む道も見えてくる。SWOT分析でチャンスの強化と弱みの対策を考えるのは有効である。
- ・ボランティア活動や地域の課題について考える地域貢献という視点も持ってほしい。

4 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

- 高質な学力（学力の3要素）を伸ばす                      ○生徒の主体的な活動など、様々な挑戦を応援する